

追悼 布施 晶子さん

酒 井 恵 真

札幌学院大学前学長の布施晶子さんが、2011年4月5日に逝去されました。73歳でした。

布施さんは2009年夏頃に体調を崩し、様々な精密検査を受けた結果、転移性のガンと診断され、間もなく大手術を受けられました。退院後しばらくは小康状態を保って、自宅近くの公園で散歩を楽しみ、デパートで買い物をしてまわり、自宅で手料理をつくってじっくり味わうなど、生きている喜びをしみじみと感じている様子でした。しかし、2011年が明けたころから徐々に病状が悪化し、ついに不帰の人となりました。

布施さんは大学院生時代に院生室で机を並べた先輩であり、日本各地のフィールドと一緒に出かけた研究仲間であり、勤務先の札幌学院大学では研究室を隣合わせた同僚であり、そして私が師事した北大教授布施鉄治氏の夫人でもありました。思えば40数年間、公私にわたり様々な高誼をいただきました。それらの思い出を語り合う間もなく、早々と旅立ってしまった「先輩・晶子さん」の足跡をたどりつつ、故人を偲びたいと思います。

晶子さんは札幌生まれ、札幌東高等学校から北海道大学（文類）に入学、文学部哲学科社会学専攻に進み、1961年3月に卒業。北大法学部の助手を3年間務め、その間に布施鉄治氏と結婚。長男（鋼治君）出産後の1964年に北大大学院文学研究科修士課程に入学。同課程修了後に博士課程に進学しましたが、1967年に鉄治氏の東京（法政大学）転出に伴い同課程を退学。東京声楽音楽学校専任講師を経て、1969年に昭和音楽短期大学助教授となりましたが、1971年に鉄治氏の北大教育学部への赴任に伴い同短大を退職し札幌に戻りました。その後は北大や酪農学園大学等の非常勤講師を務め、札幌静修短期大学教授を経て、1977年に札幌商科大学（現札幌学院大学）人文学部の開設に伴って教授として赴任。それ以来、同大学で26年間にわたって教鞭をとりました。2004年4月には第9代学長に就任。しかし、2期6年の任期終了まであと半年を残して発症、闘病生活を送りながら職務を全うしました。

略歴にあるように、晶子さんは研究者としてのスタートは早かったものの、当時の研究者を目指す多くの女性と同様、結婚、出産、夫の転勤などの都合で、最初から安定したポストに就いていませんでした。その意味で札幌学院大学に赴任した40歳頃から、研究教育活動に専念できるようになったといえます。その後は、まさに水を得た魚のように生き生きと研究教育活動に専念し、その力量を発揮していったことは、衆知のことです。

晶子さんは人文学部開設当初から専門の家族社会学の他に、北海道で初の「婦人問題（後にジ

エンダー論)の講義も担当しました。日本の大学で女性論が広く講義されるようになったのは近年になってからですが、晶子さんはその先駆者91人でした。また、北大社会学の伝統である実証研究の精神を受け継ぎ、学生をフィールドに連れ出して勤労者・生活者から直接社会現実を知る機会を与えてきました。リアルな人間と社会の理解を促す印象深い授業と、参加した学生達の間では卒業後も語り草になっています。また、ゼミや卒論の厳しい指導がかえって人気をよび、怖いけれども頼れる先生と慕われ、学生の評価は高いものがありました。布施ゼミは卒業後も固い結束力を保ち、毎年卒業式に合わせて「歴コン」と称して、歴代の卒業生が集まって「布施先生と新卒業生を囲む会」を続けていました。それが晶子さんのご自慢でもありました。

研究活動では札幌学院大学に赴任以前から著書・論文などを通じて、全国的に注目される家族研究者として頭角を現し、夙に「共働き家族」「労働者家族」研究の先駆者として知られていました。戦後日本社会の変動下で、新たに形成される家族とその諸問題を、特に働く女性の地位と役割の変化と自立化に着目した研究を進め、現代家族研究の第一線に立っていました。その成果の一端は1984年に上梓した『新しい家族の創造－「母親」と「婦人労働者」の狭間で』（青木書店）に見られますが、従来の「性別役割分業による家族」から、「男女平等の家族」の創造を展望したものとして、当時大きな注目を集めました。また、布施鉄治氏が主宰する北大生活社会学研究会の主要メンバーの一人として、全国各地での大規模な調査研究にも参加し、実証研究による分厚い研究成果を生み出す原動力ともなりました。1985年にはケニアのナイロビ大学で開かれた「国連女性の10年」を記念したNGOフォーラムに参加して「日本における婦人労働の実情」を報告。さらに1987年にロンドン大学に一年間の国外研修に出かけた頃から、イギリスをはじめ欧米の家族や女性問題を手がけ、日本と欧米の国際比較を強く志向するようになりました。また近年は高齢者問題とりわけ「看護や介護」の問題にも強い関心を示していました。

こうした研究活動の他に、様々なところから依頼される講演、コラムやエッセイの執筆を多数引き受けていたことも忘れられません。それは論文とは違って人情の機微にふれる素材を取り上げ、自由な表現ができるいいチャンスとっていました。講演や新聞の連続コラムにはかなりのファンがいるらしく、その反響の一部を聞かされたこともありました。文学好きの晶子さんは感情豊かで直截な物言いで人の心を捉える術を熟知していたように思います。

そんな中で1991年にスポーツライターである一人息子の鋼治君が結婚、間もなく孫の樹里君が誕生して「家族の幸せ」をかみしめていた姿を印象深く覚えています。しかし、その頃から鉄治氏の持病が悪化して入・退院を繰り返すようになると、晶子さんは「看護と介護」に追われる日々が続きました。特に亡くなる3年前には歩行困難となり、車いす生活を余儀なくされました。付き添いが必要な毎日に「大学の仕事も困難に感じた」と後で吐露しています。鉄治氏の入院先の病院から直接大学に通ったことも度々でした。当然にも研究活動は中断せざるを得ませんでした。しかし、懸命の「看護と介護」のかいもなく、1995年6月に「私の師であり研究仲間であり、人生の連れ合い」であった最愛の夫を見送らざるを得ませんでした。その嘆きは「動転して自裁も

考えた」と後に告白していますが、「絶望」に近いものでした。

茫然自失の状態から笑顔が戻るには時間が必要でした。しばらくして周囲も驚きつつもほっとしたのは、新しい伴侶を得て日常生活を取り戻したときです。相手の方も伴侶を亡くされた方でした。「伴侶を亡くした者同士で残された人生を4人で生きようと決心した。それに迷いはない。」と言い切ったところに、晶子さんらしい強い意志と思いが感じられ、妙に納得させられました。

活動は再開されましたが、周囲はこの有能で魅力的な人材を自由におきませんでした。学内外から公職・役職の委嘱・依頼が続きました。学内では教務部長等を勤め、学会関係では日本社会学会の理事、北海道社会学会会長など、切れ目なく続いていました。その中でも究極の期待は、学長への就任要請でした。大学間競争の激しい昨今は、学長にも大学の維持存続と競争を勝ち抜く経営的管理的手腕が要求されます。以前の牧歌的な時代の学長は名誉と尊敬の対象ではあっても、経営や管理に神経をすり減らすことには無縁であったように思います。それらを知ってか知らずか、晶子さんに期待する声は大きく、推薦者たちの再三の説得を断りきれませんでした。2年後に定年を控えて随分と迷いはしたものの、「私は楽観主義者だから」と自らを鼓舞して受諾したようです。私はそれに危惧を感じて「それよりも貴女がやるべきことは他にあるのに…」というと、「私は90歳まで書くから…」と笑っていました。

学内教職員多数の支持を得て学長に就任しました。2期6年の在期中に、こども発達学科の新設、2004年4月商学部の経営学部の改組、大学機構の改革、自己点検評価と認証評価、障がい学生支援体制の整備、奨学金制度の拡充、学習支援室の設置等々、諸「改革と課題」を前進させた一方では、学内での改革論議の空回りや関係者の利害や意見の対立など困難も多く、学長として孤独でストレスの多い日々が少なくなかったことは想像に難しくありません。しかも学長の任期をあと半年残して思いもよらぬ発症で、職務遂行が困難になった苦渋の思いは、察してもあまりあるものがあります。

その晶子さんの学長最後の仕事は、入院中の病院から車椅子で卒業式に駆け付け、式辞を述べた事でした。30分に及ぶ卒業生への激励の式辞は、会場の人たちに強烈な印象と深い感動を与えました。また、そこにはかつての教え子達も大勢駆けつけ、恩師最後のメッセージを固唾のんで聞いていました。晶子さんの執念と教師魂を如実に物語る一コマだと思います。

病気発見時に「余命8ヶ月」が宣告されていたと聞きました。しかし、1年8ヶ月の「病との闘い」を綴ったノート22冊が残されていました。その中身を伺うことはできませんが、昨年頂いた最後の年賀状にその一端が現されています。その年のキーワードは「希望」でした。そして「全くもってしんどい病気です。かれこれ二か月の絶食。己が内なる生への執着を我ながら感心の心境です。」と添え書きがありました。

誠に残念ながら「生きたい、生き続けてやりたいことがある」との願いは叶いませんでした。多くの希望と可能性を残したまま、旅立たれた先輩・布施晶子さんのご冥福を祈るのみです。

(さかい えしん 札幌学院大学名誉教授 地域社会学)